

# エディップスの政治学

——中上健次『岬』論——

斎 藤 順 司

## 1 二つの問題

〔1〕『岬』というテクストは、これまで何度も「父殺し」の代理（柄谷行人）の物語に回収されてきた。そこでは、繰り返しエディップスが参照されてきたということができるだろう。そのことは、この柄谷氏の言葉の、「父殺し」に付されるカギカッコによっても明白である。そしてこれから提出する二つの問題は、どちらもそのことに関わっている。

エディップスを参照枠としてテクストを読むことは、それを家庭関係の物語に還元することを意味する。エディップスが父—母—子の關係として記述される以上、そのような還元は必然であろう。そして問題の第一はこの点にある。エディップスによる家庭の中心化は、家庭の従属的側面を捨象するのである。それは一切を家庭へと還元し、家庭も一動因としてあつたはずの、「社会」とでも呼ぶべき対象を不可視にしてしまう。言い換えれば、イデオロギー装置としての

家庭への視座が欠落するのであり、ここで、家庭は超イデオロギー的な関係として現象するのである。

先行する『岬』論のこのような問題点は、テクストを読む際、指標を与えてもくれる。この問題からは、およそ次の二つの身振りが抽出できるはずである。一つは、家庭が再生産を担う「社会」を可視化することであり、もう一つは、エディップス的「父殺し」という家庭の物語をその「社会」において読み直してみることである。しかし、それを具体的に行う前に、エディップスのもう一つの問題について触れておく必要がある。それはこれらの身振りを行使する際の、より具体的な指標を与えてくれるからである。

〔2〕『岬』論の問題の一つが、その枠組の「家庭主義」にあるとすれば、第二はその子供主義とでも呼ぶべき点にある。周知のように精神分析は、一切の原因を子供へと還元する。フロイトがエディップスの理論から両親の誘惑の可能性を排除したことは良く知られた事実であろう。そのためエディップスは、一切が子供から発生する両親へ

の働きかけの記述として存在する。そこで両親は、初めからその対象として現象することになるのである。本論で問題とする「父殺し」に則していえば、「父」が「父殺し」を引き受けなければならぬのは、「父」だからなのである。これにより、いかなる視座が欠落するかはもはや明らかであろう。このようなトートロジカルな事態は、「父」について問うことを不可能にしてしまう。つまりエディップスにおいて「父」は疎外されているのである。

したがってテクストを「父」の側から読み直すという試みが為されなければならない。この枠組が一点目の問題との関わりで有効であるのは、「父」とは何より、子供より先に象徴界に参入した者のことだからである。つまり「父」とは「父」である以前に、すでにイ

デオロギー過程の扱い手として存在するのである。このため「父」をイデオロギー過程の扱い手とみる枠組によって、やや実体化していえば、その再生産の対象としての「社会」も浮上すると考えられる。これにより、家庭の物語をその「社会」へと再配置することも可能となるであろう。子供主義の反転は、テクストを「家庭主義」から離脱可能にするのである。

エディップスを参照することの二つの問題から出発して、そこから読みの枠組を抽出し終えた今、テクストを具体的に検討していくなくてはならない。

## 2 この土地／あの男

前述の枠組から、この小説の主人公「彼」の実父に関する言説を

眺めるとき、改めて異様な事態として意識されるのは、例えば次のような部分である。

あの男は、何人の女を泣かせただろう。何人の男から憎まれていらう。いつも噂にのぼつたあの男も、それから、文昭（彼）の義兄——引用者注の女親も、この狭いところで生きているのだ。愕然とする。息がつまつた。彼は、ことごとくが、うつとうしかった。この土地が、山々と川に閉ざされ、海にも閉ざされていて、そこで人間が、虫のように、犬のように生きている。（傍線引用者・以下同様）

「あの男」は「この狭いところ」で「いつも噂にのぼつた」。分量としてはごく僅かなこの言説が無視できないのは、テクストにはこの「男」について、次のような言説もまた存在するからである。「一体、その男は、どこから流れてきたのだろう」。しかし、この二つの言説について考える前に、まずは先の引用中、後半部分を検討しておきたい。そこに確認できる事項を補助線として、この二つの言説から実父に起きた事態を想定してみたいからである。

引用の後半、「彼」は「この土地が、山々と川に閉ざされ、海にも閉ざされていて、そこで人間が、虫のように、犬のように生きている」と語っていた。つまり「彼」は「山々と川」そして「海」に「閉ざされ」ていること、「人間が、虫のように、犬のように生きている」とによって「この土地」の「この」つまり「この土地」の

唯一性を保証させているのである。注目したいのは、このうち前半部である。四畳の自然に「閉ざされ」ていることが「この土地」の唯一性を保証する条件であるという「彼」の言説。注意しなければならないのは、四畳の自然に「閉ざされ」るというのは自然そのものの状態ではないということである。ここでは四畳の自然がある範囲を「閉ざ」すものとして認識されている。つまり「彼」のこの言説は、四畳の自然を境界線として発見することによって成立しているのである。「彼」によりこの言説が可能なのは、サイードの言葉を借りていえば、「四畳の自然に、すでに『心象地理』<sup>(4)</sup>的機制が適用されていることによってなのであり、その条件によって「この土地」が成立して以後のことなのである。

このような認識の成立を、「彼個人の志向に完全に回収してしまって」とは不可能であろう。本論ではこの認識の成立を、したがつて「この土地」の成立を、「彼」の実父が「流れて」くる以前に論理上仮設してみるものである。そのうえで先ほどの二つの言説を考慮に入れるならば、そこに次のような因果関係を想定することが可能であろう。つまり「心象地理」に基づいて安定した「この土地」の秩序に、「彼」の実父が「どこから」か（「この土地」以外）「流れてきた」ことによって混乱が生じ、それが「この狭いところ」＝「この土地」で、「あの男」が「いつも噂にのぼった」という事態を出現させた、と。より具体的にいえば、「この土地」の者たちは、「心象地理」の秩序を混乱させた「外来物の馴化」を、「噂」によってその「機構の中で事物のおののにその果たすべき役割を与える」こと

で行ってきたと考えられるのである。こうして、テクストにおいて「彼」の実父の担う再生産過程が「この土地」を対象としたものであることが明らかとなる。「噂」により表象＝支配されることで、「彼」の実父（正確には表象された実父）が担わされるのは、それによって「与え」られた「この土地」「の中」で（略）果たすべき」何らかの「役割」なのである。ここでは『オリエンタリズム』を踏まえつつ、「外来物」の「果たすべき」その「役割」は「機構」を反照する鏡像的なものであるだけ、いつおぐこととする。この「役割」について明らかにするためにも、まずは、「彼」の実父がいかなる表象において支配されているのかを見ておかなければならない。「彼」の実父に関する「噂」の言説には、例えば次のようなものがあった。

あの男に関する噂は、知っていた。新地に若い女を廻っている。いや、この姉は、それは確かに彼の腹違いの妹にあたる女だといつた。

「彼」によつて語られる「あの男に関する噂」である。以下、「彼」の実父が「表象」によつて与えられた恣意的イメージを抽出するため、これを「彼」の語る「その男」に關する言説と比較していく。しかしその前に、なぜそのような併置が可能となるのかに触れておくこととする。

その理由は大別すると二点ある。「外来物」としての「彼」の実父の參入を「この土地」成立後に行われたとみる本論の立場によれ

ば、その時点から開始された表象＝支配としての「噂」は、テクストの現在時までに強化されたと考えることができる。そして強化とはいうまでもなく、その「噂」の表象するイメージが「真実」性を獲得する過程のことである。そしてここに一点目の理由がある。

「彼」の主体化は、実父の「噂」が「真実」化しつつ「いつも」周囲にあるという状況の元で行われてきたのである。「一点目は、「彼」がこれまで一度も実父と暮らしたことがない、現在も「町中でたまたまに会つて」「話しかけて」来れば「一言、二言話を交わす程度の関係しか持っていない」という点である。つまり一人の関係には、「彼」が「真実」化された実父のイメージの恣意性に気付く契機がほとんど存在していないのである。これらの理由により、「彼」によ

る実父の言説は、ほとんど「噂」の圈内にあると見なすことができるのである。そのために、「彼」が「その男」に関して語る、以下のようないいふこと、つまり「好色」で「淫乱」な「その男」は、「あの男に関する噂」において現象する「あの男」ではあっても、「彼」の実父そのものではあり得ないのである。そして、テクストにはこの「<sup>(8)</sup>」を象徴的に示す以下のような局面が存在している。

何時か、セメントを安雄（「彼」の姉の夫の妹「光子」）の恋人——  
〔引用者注〕と取りにいって、彼は出会つた。彼は最初、気づかなかつた。

彼は、その男とよく似ていた。彼は、時々思つた。彼の体の中に、も、女と見れば、（略）娘であろうが手を出す、好色の、淫乱の血が流れている。

傍縁部が「あの男に関する噂」のエピソードと同一であることは明らかであろう。つまり語りの形式の差異にもかかわらず、この言説は「噂」的なのである。そして「噂」にしか過ぎないそのエピソ

ードを、自らの「体の中」にも「流れている」実父の「血」の問題として、つまり「血」縁という生物学的「真実」として語る「彼」は、確かに、「噂」の「真実」化の圈内にいた／いるのである。したがつて「彼」が実父の「真実」の属性としてこのエピソードを用いて表象する「好色」性、「淫乱」性は、実際には「この土地」の側から「彼」の実父に与えられた恣意的なイメージと考えられる。つまり「好色」で「淫乱」な「その男」は、「あの男に関する噂」において現象する「あの男」ではあっても、「彼」の実父そのものではあり得ないのである。そして、テクストにはこの「<sup>(9)</sup>」を象徴的に示す以下のようないいふ場面が存在している。

「真実」として語る言説において見た通りである。そして繰り返しになるが、その「噂」は「この土地」に「流れてきた」「外来物」実父を「役割」と表象・支配するものである。この「役割」が「この土地」の秩序を反照する鏡像的なものであることは、『オリエンタリズム』に抛りつつ先に示唆しておいた。ここで、その時の機制をより具体的に言えば、それは、「この土地」の側との差異を強調しつつ「外来物」を「表象」することにより「この土地」でない側へと「支配」し、その「外来物」を自らの相対的自立性を引き出す手段とすることである。この一連の機能で、本論において重要なのは、「噂」が差異を強調する構造を持つという点である。つまり「噂」によって自らの実父認識を構成している「彼」にとって、実父は「この土地」の者との他者性を強調された存在としてあるということがなのである。当然、「噂」と共に想起される「あの男」はその範疇にある。だからこそ度重なる想起にもかかわらず、「最初、彼は気づかなかつた」という事態が起こってしまうのである。「彼」は目前の身体に即座に表象によって捏造された他者性を発見することができなかつたのだ。

この遲延がいかなる事態により生起したかはもはや明らかである。そこでは「噂」的な「あの男」にただちに回収されることのない、それと差異を有した、いわば実父自身が現象していたのである。しかし実父自身が現象するのは、「彼」の認識の成立の遅延といふ僅かな時間でしかない。「噂」的言説によって認識の枠組を構成している「彼」は、認識の成立と共に、それを「噂」的な「男」へと

回収してしまう。つまりその瞬間、実父自身は再び「この土地」を支える鏡像的「役割」と駆致されてしまうのである。ラカンの言葉を借りていえば、その時実父自身は「<sup>(母)</sup>もの」と化すのである。そして恐らく、先の引用に続く対面的具体的局面はそのことを示唆している。それは以下のように続けられていた。

「あかん、あかん、光子にしほられるとから、あらあらやわ」と安雄は弁解した。安雄とは、力がまるつきり違う。彼にはセメントの一俵ぐらい軽いものだった。それをそいつがみていた。(略) いつ見ても大きな男だった。(略) そいつは、黙ったまま、動きもしなかつた。

「彼」によって、こちらを「みていた」者が「そいつ」と認識され眺められると、「そいつは、黙ったまま、動きもしなかつた」という事態が到来する。これは「彼」の認識が、実父を沈黙し不動の状態に導いたと見ることができるだろう。「彼」の認識の成立は確かに、沈黙し不動のまさに「もの」的な状態へと実父を回収してしまっているのである。

### 3 1) の土地とイデオロギー

これまで、「この土地」において「噂」により、「彼」の実父が「好色」で「淫乱」な「男」「<sup>(19)</sup>「噂」的な「あの男」へと表象・支配されているという事態を確認してきた。次に問題となるのは、「この土

地」の鏡像的「役割」を担うその表象が「この土地」のいかなるイデオロギー関係において「眞実」化され、その再生産を保証してきたか、という点である。

ところで、テクストには様々なレベルで「彼」と対照的に語られる安雄という人物が存在している。彼等のコントラストは、例えば、「彼」に「吐き氣」を催させる安雄の「わきがのにおい」と娼婦に「くさいことあらへんな」と言われる「彼のわき」や、「赤いカーテン」があり、その上にぬいぐるみの犬が置いてある安雄の部屋と「部屋を飾りたてたり、部屋に物を置くのは、彼の性に会わなかつた」と語り、「ほんど何もない部屋」「離れの四疊半が、彼の部屋だった。壁に一枚、女優のグラビアが貼つてあった。他になにもなかった」と暮らす「彼」という所などに見られる。これらの対照性は、この一人と「この土地」のイデオロギーとの関係の差異を示唆するといえる。具体的にいえば、自らにおいて「尊」が「眞実」化されていることに、したがってそこに働くイデオロギーにも無自覚な「彼」に対して、安雄はそのイデオロギーが表し出する、ある関係の恣意性に言及可能な存在と考えられるのである。

この位置を安雄に保証したのは、安雄が従事していた「船乗り」という職業だといえよう。それは「この土地」以外の関係性を生きる契機として把握可能だからである。そこでは「この土地」内部の関係の恣意性が対象化され、認識のレベルで「この土地」外部の者となることが可能となる。しかし安雄の外部性は「船乗り」についての一般論からのみいつのではない。テクストの言葉のレベルにおいて

て、それは示唆されているのである。先に引用したように、「彼」の実父は「この土地」に「外来物」として「流れてきた」者であった。そして安雄は「船乗り」という「流」動的職業に従事していた者なのである。(つまり安雄はこの「流」動性により、「この土地」の「外来物」実父と通底しているのである。したがつて安雄の言説において、「この土地」の関係の恣意性に、つまり「この土地」のイデオロギーへ接近可能であると考えられる。その安雄が異化するのは、具体的には次のような関係であった。

親方〔彼〕の姉の夫—引用者注)が笑いながら、「安雄、秋幸に変な遊び教えたら、承知せんと」

安雄は、(略)「はい、はい」と調子よく相槌をうつ。「なあ、秋ちゃん、いつまでも監視つきの赤子」とちがうのになあ」

安雄が「彼」を「女」「遊び」と説いて、「彼」が同意した直後の局面である。ここで親方の禁止が、その同意に介入している。そして安雄はそれをうけて、「彼」を「監視つきの赤子」と呼ぶのである。(つまり安雄は親方と「彼」との関係を、「彼」に対する「女」「遊び」の「監視」と捉えていたのである。しかし安雄が照らし出したこの関係は、この局面において、緩やかな愛奏としてあるということもできるだろう。「彼」はこの場ではその誘いに同意し(「遊びにいこ」彼は安雄に答えた)、親方の禁止も安雄へと発される間接的な、しかも「笑いながら」為されるものであった。おそらく

く、より本来的な「彼」への「女」「遊び」の「監視」は、以下の局面で明らかになるようにその母との関係として存在するのである。

「月給もろたら、今度こそ、ええとこ行こうよ」文昭は言い彼の裸をみまわした。彼は母の顔を見た。

誘う文昭、誘われる「彼」という構図において、この局面は先の安雄との関係と同型のものである。しかしもがかわらず、「彼」の反応は先の引用のものは明らかに異なっている。「彼は母の顔を見た」だけで同意を口にする事がない。ここで、「彼」の同意は母の存在によって抑圧されているのである。「彼」に同意を許さず、「顔」色を伺われるかのように見られる母が、「女」「遊び」の「監視」者としてより高次の存在であることは明らかであろう。つまり彼とその母との間の「監視」関係のほうが本来的なのである。そして現在時において「彼」が「女を知りたくなかつた」と語り、「女」を「余計なもの」として自らの生活から排して生きているのも、正確にこの事態と関わっているのである。

したがつて「『岬』の主人公」を「余計なもの」「やつかいな物」「一切」をそぎ落としてしまいたいと願う<sup>(12)</sup>者と直載に語る渡部直己氏の言に賛同することはできない。「彼」が「願う」のは、単にそれだけではなく、以下で明らかにするように「一方で「余計なもの」と考へている「女」を「現実に」「抱く」ことでもあるのだ。

女は、手を引いた。（略）彼は息苦しかった。あと一つ、腕を強く引いてくれ、と彼は思った。そうすれば、今日こそは酒をのみ、夢の中ではなく、現実に女を抱く、女を初めて経験する。

「今日こそは」というよう、「彼」は「現実に女を抱く」ことをこれまで欲望してきたのである。「彼」は単に「女」を「余計なもの」として「そぎ落としてしまいたいと願う」者ではない。「彼」は「女を抱く」ことを欲望しつつ、「女を知りたくない」とも「願う」者なのであり、そこには「抱く」ことをめぐって、それを欲望する自己と禁止する自己という二重化した主体の姿を認めることができるのである。ここで、禁止する自己を超えた自己と言い換えても同じことであろう。そして、それは自己にとって禁止を行ふ他者と超えた自己である。つまり内面化する以前には、それは自己にとって存在したのである。「女を知りたくない」と「願う」「彼」の志向は、それを禁じた／＼他者の志向なのである。そしてこれは「女」「遊び」の強力な「監視」<sup>(13)</sup>を行ふ「彼」の母の志向と正確に一致しているのである。

ところで、「監視」者である「彼」の母は自らに男性との関係を禁じてきたわけではなかつた。それどころか、彼女は「先々夫」の死後、ただちに「彼」の実父と一緒になり、その実父が刑務所に入ると、今度は現在の夫と結婚するというように、男性遍歴を重ねてきていた。つまり母と「彼」との関係は、性的に奔放な母から「彼」

への「女」「遊び」(性的奔放)の強力な「監視」=禁止として存在するのである。そしてこの関係は、この母子にだけ特有なものではない。安雄の恋人、光子の存在はその意味で示唆的である。彼女の行動は、あたかも以前の母のそれをなぞっているかのように進行するのだ。例えば、「彼」の母は、ある時「先々夫」との間の「兄妹だけ、放つたらかして」「現在の夫と「逃げようとした」ことがある。光子もまた安雄との「駆け落ち」のため「子供を放つたらかした」とことがあつた。光子もまた安雄の「駆け落ち」のため「子供を放つたらかした」ことがある。しかもこの光子は、現在時において安雄が刑務所に入るとただちに「若い男を、引っ張り込む」ことになり、現在の夫と一緒にになった女性なのである。

この二つの符号が示唆するように、性的奔放さは「彼」の母のみの志向ではない。それは、もつと一般的なものなのである。したがつて母と「彼」の「監視」関係も同様にもつと一般的なものと考えられる。それは、以下のようないふ葉の一一致において示唆されている。「どうでもええような事やが、しちめんぐくさい関係やからなあ」母は座り込む。彼はその母を、孕んだ犬のように思つた。

性的に奔放に振る舞い「しちめんぐくさい関係」を形成した母を、「彼」は「孕んだ犬のようと思つ」ている。しかしまだ「犬」とは「この土地」を保証する条件において、「彼」に用いられた「この土地」の「人間」の比喩でもあつたのである。「そこで人間が、虫

のように、犬のように生きている」。性的に奔放な「彼」の母は「この土地」の「人間」そのものなのである。しかもその「犬」の比喩は「孕んだ」と語られるように、「彼」にとって女性化されている。つまり性的に奔放な「犬のように生きている」のは、母や光子のような女性たちなのである。同様に、「彼」も言葉の一一致によって「この土地」の「人間」そのものとしてあることを告げられている。テクストの冒頭部には以下のようないふ葉が存在していた。

地虫が鳴き始めていた。耳をそばだてるとかすかに聞こえる程度だった。耳なりのようにも思えた。

なものだということができよう。そしてこれが実父の、「好色」で「淫乱」な「男」という表象を「眞実」化し、自らの再生産を保証してきたのである。

なぜならこの表象を鏡像として、自らの「この土地」の「男」としての同一性を確立する時、彼等は「好色」で「淫乱」でない「男」として自らを規定しなければならなくなるからである。ここで、「好色」「淫乱」を性的奔放と言い換えれば、事態はもとより明確になる。つまりこの時、彼等は性的奔放でない「男」として自らを規定せざるを得ないのである。これにより、性的奔放に関する「この土地」のイデオロギー関係は、確かに維持されることになる。そしてそれは、実際に以下のように機能しているのである。

いや、一度それ（「女」——引用者注）を知ると、とめどなくのめり込み、どんどんになり、女とみれば見境なしに手をつけたあの男と同じになってしまいそうな自分が不安だった。「安うしどくから寄つてえ」女は、手を引いた。路地の角の木が、ゆれていた。

「それを知る」方に、したがつて「女とみれば見境なしに手をつけたあの男と同じになつてしまつまい」得意の方に、「女」が「手を引く」と「ゆれてい」る「木」を見いだす「彼」。そして「木」とはまた、「彼」にとって自らを假託する存在であった。「彼は、その木があ自分と似ているように思えた」。つまりここで「彼」が見いだすのは、ほとんど自らが「ゆれてい」という事態なのである。したが

って逆にいえば、次のようにいうことができる。すなわち、「女とみれば見境なしに手を付けた」（「好色」で「淫乱」な）実は「噂」的な「あの男と同じにならない」ことが、「彼」の自らが「ゆれる」と「彼」において「眞実」化した、「好色」で「淫乱」な「噂」的「あの男」は確かに鏡像的「役割」を担つていたのである。

#### 4 差異化される「父殺し」

エディプスが持つ二つの問題から出発し、それを参照することが地へと追いやつた「社会」を「この土地」として抽出し、そのイデオロギー機制を記述してきた。残された課題は、その問題から抽出されたもう一つの試み、すなわち前述までの状況にある「この土地」において、「父殺し」という家庭の物語がいかなる相貌の元に立ち現れてくるか、を確認することである。

しかしそれ以前に多少なりとも触れておかなければならないことがある。<sup>(14)</sup>前章までとの関わりからある程度まで明らかのように、通常「父殺し」としてのみ読まれてきた「彼」と妹と思われる娼婦との行為は、単にそれのみにとどまらない、という单纯な事実である。ここでその行為は、「彼」によって二重の意味を担わされている。一方でそれは、実父の「血で繋がった」妹との近親相姦と想定されることで「父殺し」を担い（しかし、それは本当に「父殺し」であろうか？）、他方でそれは、娼婦を買うことで「母」からうけた強力な性的奔放の「監視」＝禁止を破棄する行為ともなる。そ

して「彼」は、ある程度までそれを自覚してその行為に臨んでいたのだ。

彼は歩いた。その男と会う事を願った。（略）その雄と決着をつけてやる。（略）彼は、高ぶっていた。醜いことをしでかして、あいつらに報復してやる。

この後、「彼」は「新地」にたどり着き、「報復」としてのその行為を実際に行うことになる。そして一見して明らかのように、それは一人「その男」のみを対象としたものではないのである。それは「あいつら」を対象として行われようとしている。ここで、この引用の直前に語られる彼の言説「母からも、姉からも、遠いところへ行きたい」と思った。（略）母の子であり、姉の、弟であることは確かだつた。だが、それがいやだった。不快だつた。」を考慮にいれるならば、そこに母ならびに姉（姉もまた母同様、「彼」の性的奔放を禁止する者である。例えば、早くも冒頭近くにおいて、姉は「彼」に向つて「光子と、あんまり親しいにしたら、あかんよ。姉やんはいややから。きょうだいでごたごたする」と、禁止の言葉を発している）も含まれることは明らかである。これから確認する性行為の具体的な局面が、あまりに「父殺し」的だとしても、そこにはいわば、母殺しの契機も孕まれていたのである。

しかしにもかかわらず、やはり事態は図式的なまでに「父殺し」的に推移しているといえる。おそらくは、テクストに「父殺し」を

読む場合の格好の言説となる、「彼」による自己言及（「自分が、あの男の子供を犯そうとしている（略）あの男そのものを凌辱しようとしている」）と共に語られる一度目の性交渉に続き、二度目のそれは以下のように語られていた。

女は声をあげた。汗が吹き出していた。おまえの兄だ、あの男、いまはじめて言うあの父親の、俺たちはまぎれもない子供だ。性器が心臓なら一番よかつた、いや、彼は、胸をかき裂き、五体をかけめぐるあの男の血を、眼を閉じ、身をゆすり声をあげる妹に、みせてやりたいと思った。（略）いま、あの男の血があふれる、と彼は思った。

「凌辱」の対象としての「あの男の血」を「五体」に「あふれる」ほど「かけめぐ」らせる「彼」。ここで語られる事態が、「父殺し」を通じて、その対象としての「父親と一体化しようという願望」を果たす、フロイド的「父殺し」と即応的であることは一見して明らかであろう。テクストが、何度も「父殺し」の物語として読まれてきたのも、ある意味では必然だったといえる。しかし現在、テクストにこのあまりに図式的な物語のみを読むことはやは不毛でもある。問題は、容易に取り出せてしまうその図式ではなく、それがいかにずらされ、その結果、どのように現象しているか、を見ていくことである。そして端的にいって、これまで本論で試みられてきた作業は、そのためにこそ行われてきている。具体的にいえ

ば、先の引用において「彼」がその「五体」に「あふれ」させ、そ  
うすることでおらの「体の中」に「父親」を引き受けたかのよう  
な、その時の「あの男の血」の内実を確認していかなければなら  
い。

このときただちに想起されるのは、「彼」が自らにも「流れてい  
る」と語った「男」の「血」が、実際には「噂」によって「眞実」  
化された恣意的なイメージであったと言うことである。そして、そ  
れは「彼」の実父が表象Ⅱ支配された、「この土地」のイデオロギー  
関係の再生産過程を担う「役割」であった。つまり、「彼」が「父  
殺し」を演じ、「一体化」したのは「彼」の感情にもかかわらず、  
「父親」ではあり得ない。実のこと、それは再生産過程を担う  
「役割」との間に行われていたのである。「彼」の「父殺し」の一  
切は、「女の手」が「彼」の勃起した性器をつかみ、力をいれてにぎ  
る」という状況下において、つまり、性的奔放の謡歌を許される  
「女の手」の中、言い換えれば、それを許す「この土地」のイデオ  
ロギーの「手」の中において、その再生産装置として生起してい  
たのである。

したがつて、「彼」に則して言えば「ギリシャ悲劇」的な高揚と  
ともに『岬』一篇の劇的な結語をなす<sup>(16)</sup>といえるかもしけない先の  
引用部分は、仮に「…悲劇」的と呼ぶとしても、それは「ギリ  
シャ悲劇」的だからではあり得ない。（「うまでもなく、フロイ  
ドのエディプスは「ギリシャ悲劇」に想を借りたものである。）も  
し、これが「悲劇」だといえるならば、むしろ「劇的な」「高揚」

## 注

- (1) 「三十歳、枯木灘へ」（中上健次全集）月報1、'55 集英社
- (2) ジル・ドゥルーズ＝フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプスと資本主義と分裂症』市倉宏祐訳、'86・5 河出書房新社
- (3) ドゥルーズ＝ガタリ前掲書においても、この点に関する記述があ  
る。
- (4) 『オリエンタリズム』今沢紀子訳、'81・4 平凡社
- (5) サイード前掲書
- (6) サイード前掲書
- (7) 結秀美による「中上健次にあつて「男」とは、（略）「女」たちによ  
つて語られた言葉であると言えるだろう」（傍点原文）という指摘  
（「母」の力）『現代思想』'80・11 / 『メタクリティック』'83・12 国  
文社）は、だからこの局面を正確に表しているといえる。ここで、

と共に「彼」に遂げられる「父殺し」が、その思惑にもかかわら  
ず、いささかも「父殺し」など意味していない点にあるのではない  
か。（もちろん、これは視点を変えれば、喜劇的ですらあるが）。  
いずれにせよ、それを「ギリシャ悲劇」—エディプス的「父殺  
し」の物語—として読むことは、テクストが脱構築したもののを  
再構築することしか意味しないだろう。それは、テクストが「父殺  
し」のパロディ的反復を通して露呈した、その行為のイデオロギー  
性を再び隠蔽してしまうことに通じる。しかし、もし「フロイト  
にあつてはリビドー的なものが政治的なものを隠蔽」<sup>(17)</sup>ていると  
言い得るならば、その隠れた紐帶こそが、テクストによって露呈さ  
れたものであるのだ。

「彼」が自らの属性と「思ひ」てゐるのは、正しく「姉」(「女」)が「へつた」「言葉(尋)」なのである。

(8) この点で、例えば『『岬』の主人公は(略)かつて都男が母親とそ  
の新しい夫に抱いたのと同様の憎悪を、自分の実の父親である「あの  
男」に抱いている」と語る四方田犬彦の指摘(「五衰の悦び」『新潮』  
'81・3)、『貴種と転生・中上健次』'81・8 新潮社には、少なから  
ず留保を要する。そしていまでもなく、このよべな認識は『岬』論  
に少なからず存在している。

(9) J・ラカンに倣つていえば、このすれば「生のまさしく今ここにある  
現場からのすれゆき」(『エクリ』宮本忠雄他訳('72・5 弘文堂)  
としてある。

(10) 再び、ラカンに倣つていえば、実父自体とは「彼」の「生のまさし  
く今そこにある現場」(ラカン前掲書)に存在するものといふことが  
できるだろう。

(11) ラカン前掲書

(12) 「真近さについて」(『新潮』'94・4/『中上健次論 愛しさとい  
て』'96・4 河出書房新社)。しかし渡部が一方で『『岬』の秋幸』を  
「母や姉の命づけるまま性交はおろか自慰さえも禁じながら」「仕事に  
汗を流す」「存在」と言及していくことも指摘しておく。(核心につい  
て)『群像』'95・12 渡部前掲書)

(13) ここでなぜ、母による「女」「遊び」の「監視」がその禁止かとい  
えば、先の引用においてみたように、母の存在が、彼に「女」「遊び」  
に「行」くことの同意をさえ禁じていたからである。(つまり、母との  
関係において、彼は実際に「女」と「遊び」ぶことより低次にあるその  
同意をさえ禁じられていたのであり、ここで、より高次にあるその実  
行が禁じられてあるのは当然なのである。

(14) しかし、ここでは触れたどまつてしまふ」ともまた事実であ

る。これは、エディプス的「父殺し」の問題点から出発した本論の必  
然的な方法的限界であるかもしない。

(15) G・フロイト『トーテムとタブー』西田越郎訳(『フロイト著作集  
3』'69・12 人文書院)

(16) 渡部前掲論文

(17) J・F・リオタール「エネルギー態としての資本主義」篠原資明訳  
(『現代思想 総特集 ドクルーズガタリ』'84・9)

付記 中上のテクストの引用は『中上健次全集3』(集英社)による。

(せいじゅう・じゅんじ 成城大学大学院博士課程前期)